

中世英詩*Cleanness*における聖書積義の 影響および写本の伝播について

Middle English Religious Writings and *Cleanness*

田 口 まゆみ (教養部)

Mayumi TAGUCHI

14世紀末英国の代表的な詩人といえまづ Chaucerだが、その作品に並ぶ名作として *Pearl*、*Sir Gawain and the Grene Knight*を挙げることができる。作者不詳のため、詩人を *Pearl*の詩人、あるいは *Gawain*の詩人、そして彼の作と推定される詩作品を *Pearl* (*Gawain*) グループの詩と呼び慣わしている。 *Cleanness*はこのグループに属する宗教的色彩の濃い頭韻詩である。冗長さも手伝って、主題の行処が見失われがちであり、多くの研究者が構成上の欠点があると評してきた。

筆者は、これを、現代読者と中世読者の間の感性と知識、また社会背景の差異に起因すると推測し、そうした観点から *Cleanness*の主題と構成の解明に挑んできた (“Theme and Structure in the Middle English *Cleanness*”、『産大論集』人文87)。本詩を構成す多数の聖書中のエピソードとその解釈との相互の関係を明らかにしてゆくことによって、*Cleanness*の真価により近づくことができると信じ、本題のように研究方向を定めた。

一方、*Cleanness*の新校訂版 (H 5年刊行助成) を経て、英国での在外研究を機に、中世古写本の中に未校訂・未刊行のまま残存する宗教文献と同時代の文学作品との関連に注目してきた。特に Cambridge、Magdalene College、MS Pepys 2125の未刊行作品を中心に研究を進めているが、その中に *Cleanness*と共通するエピソード、イメージ、表現、ロジックを含む作品を見出すことができた (H 8年12月、中世英語英文学会にて口頭発表)。

この小品は、説教原稿の一種とも、修道僧の教育のために書かれたものとも受取られるが、共に同写本に収録されている文献の多くが当時広く流布していたものであること、また筆写されたという事実自体が、本作品の当時における重要度、ポピュラー度を証明している。時の流れの中で喪失された写本の数を考慮に入れるなら、さらに水増しして考えても良い。また英語で書かれていることから、一般信徒の信仰の基盤を、あるいは当時ポピュラーであった教化のパターンを反映していると推測できる。

つまり、*Cleanness*の難解なテーマ展開は、キリスト教の浸透した当時の社会の「常識」とも呼べる概念を骨組みとしていると言えるのである。さらに *Cleanness*の作者が何を意図したかは別として、本詩の構造は当時の説教の華麗な様式を模したものだと言った (添付論文、“*Cleanness* and a Hitherto Unedited Text in MS Pepys 2125”)。

本研究は継続中であり、筆者は、中世文学研究において中世の特異な宗教性との関連を強調すべき点を主張してゆく所存である。そのためには、他の多くの写本をその性質と伝播経緯の側面から考察してゆく。